



ジョセフ・ロージー

ハリウッドの灯は遠く

JOSEPH Losey

Joseph Losey: The Man with Four Names Time without Pity Eva

Suspense! Decadence! Mysterious! and Spicy!



Distributed by Bitters End Inc.



Joseph Losey

ジョセフ・ロージー★ハリウッドの灯は遠く

映

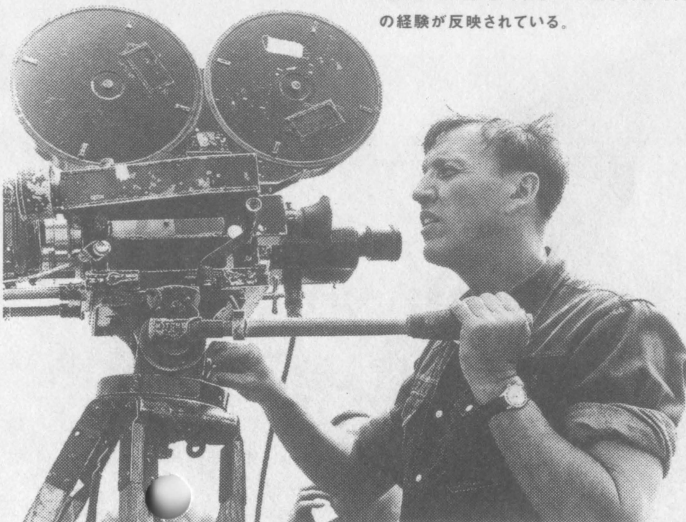
画は何とも厄介な体験だ。憑いたり憑かれたりすることが、嘘のような容易さで実現されてしまうからである。中田秀夫もまた、憑いたり憑かれたりすることで映画との接点を確認しながら、作家として登場した。『女優霊』や『リング』の監督なら、それも当然だといわれるかもしれない。だが、事態はそれほど単純ではない。彼が憑かれていたのは、女優の霊でも、鈴木光司のベストセラーでもなかったことが、いま明らかになろうとしているからだ。中田秀夫が憑かれていたのは、四つもの名前で作品を発表しなければならなかった一人の亡命映画監督である。

その名前はジョセフ・ロージー。ハリウッドが念入りに育て上げ、ハリウッドが惜しげもなく追放したもっとも魅力的な人物の一人である。彼は、青年時代にソ連を訪問したこともある、筋金入りの社会主義運動家だった。傲慢さと傷つきやすさとがやうい均衡をつくりあげていた複雑系の作家ロージー。この誇り高い「反体制知識人」を生産したことは、アメリカ合衆国の誇りである。断言しよう。彼の亡命生活は、タルコフスキーのそれなどより遥かに貴重な20世紀の体験なのだ。

中田秀夫は、映画監督となるにあたって、この監督に憑き、憑かれることを進んで選択した。彼は、五年以上の歳月をかけてロージーの関係者たちをインタビューし、その書物を翻訳しながら、16ミリ映画を完成させた。時間と空間を越えたこのときならぬ憑依の実験を祝福しよう。実際、FBIを出し抜いて亡命した父親とはながらく会うことのなかったロージーの長男の表情の推移と声の抑揚を、いま、日本のスクリーンで見たり聞いたりできるなどと、誰が想像しえただろう。それが、今回中田秀夫のイニシアティブで初公開される傑作『非情の時』とどれほど深いかわりがあるかを知らされ、胸を打たれる。

『非情の時』がそうであるように、「ジョセフ・ロージー/四つの名を持つ男」は、映画に憑かれた中田秀夫の賀沢きわまりないプライベート・フィルムである。実際、年輩したハワード・コッチの登場は背筋に戦慄が走り抜けさせずにはおかないだろう。私はその遠視しきった表情を視線で追いつながら、学生時代の中田秀夫と映画館で偶然に出会ったことを不意に思い出す。上映されていたのはマックス・オフルスの『忘れしの面影』。彼にとっても私にとっても、この傑作を見るのは十何回目だったはずだ。その脚本家がほかならぬハワード・コッチなのである。

驚くともよい。まだ『女優霊』を描けてもいなかった中田秀夫は、アカデミー賞受賞者でもあり、赤狩りのブラック・リストにも名を運べたことのあるこの温厚な老人にカメラを向けたとき、こみあげてくる涙を抑えきれなかったはずだ。この偶然こそ、映画に憑かれた者だけに許される賀沢な感動にほかならない。



ジョセフ・ロージー

1909-1984
アメリカ、ウィスコンシン州生まれ

ヨーロッパではヴィスコンティやブニエルと並び称されているにも拘わらず、日本では作家として紹介されることのなかったジョセフ・ロージー。

彼は'52年ハリウッドの赤狩りでヨーロッパに亡命、三つの変名を使って映画を撮り続けた。『非情の時』で初めて本名をクレジットすることが許された後、『エヴァの匂い』『唇からナイフ』『暗殺者のメロディ』など問題作、話題作を発表。'67年『できごと』『71年『恋』ではカンヌ映画祭で受賞。ハリウッド映画とは違い、感情や思考の裏側を見せることで彼の作風は非常にヨーロッパ的であると言われる。ロージータッチとも呼べるその独特な表現方法は、ドキュメンタリーでも語られるように、少年期に父を喪ったことによる彼の複雑な人間性、亡命直後の不遇な変名時代の経験が反映されている。

上映作品

『ジョセフ・ロージー/四つの名を持つ男』

「亡命直後のロージーの知られざる変名時代に光をあてたい」と中田秀夫が5年の歳月をかけてロージーの家族、スタッフ、俳優にインタビューしたドキュメンタリー・フィルム。今まで語られることのなかった彼の複雑な人間像に迫る。

1996年 | 日本映画 | 16mm | カラー | 83分
監督：中田秀夫 | 製作：秀作工房 | 配給：ビタース・エンド

『非情の時』

24時間後に死刑の迫った息子。その冤罪をはらすべく奔走するアル中の父親。親子関係の喪失と再生を深い焦燥感の中に描き出す。日本初公開となる本作は、ロージーの最高傑作との呼び声が高く、実生活での彼と息子との確執が色濃く反映されている。

1957年 | イギリス映画 | 35mm | 白黒 | 88分
提供：秀作工房 | 特別協力：中世の里なみおか映画祭 | 配給：ビタース・エンド
監督：ジョセフ・ロージー | 出演：マイケル・レッドグレイヴ、アン・トッド、レオ・マッカーン

『エヴァの匂い』

1962年 | フランス映画 | 35mm | 白黒 | 112分 | 配給：デラ・コーポレーション
監督：ジョセフ・ロージー | 出演：ジャンヌ・モロー、スタンリー・ベイカー、ヴィルナ・リージ

ジョセフ・ロージー★ハリウッドの灯は遠く
7/18日～8/14日 連日モーション

7/18日～31日 11:55AM～
非情の時

8/1日～7日 11:30AM～
エヴァの匂い

8/8日～14日 11:55AM～
ジョセフ・ロージー/四つの名を持つ男

前売券=1400円 (当日=1700円 当日学生=1400円)

ホワイティ梅田泉の広場M-10右上がる東へ5分
扇町ミュージアムスクエア
06-361-0088